

あらためて学び直す

むきばんだやよい塾 塾長 藤田憲司

悲しい知らせ

冒頭ですが、悲しいお知らせです。1月のやよい塾のあとに伺ったのですが、前任のむきばんだやよい塾塾長の狩野久先生が昨年末に永眠されました。いつも、にこやかな笑顔とわかりよい語り口で導いてくださった先生でした。もう一度お会いしたいと思いながら果たせなかったことが悔やまれます。ご冥福をお祈りします。

長瀬高浜遺跡の記憶

オンラインでやよい塾の講座を受講できるようになったことにあらためて感謝したい。毎月の各氏の講義を直接拝聴できるようになって、不勉強・未熟を実感し、学び直さなければならぬことがたくさんあると気付いた。長瀬高浜遺跡もそうだ。この遺跡の名を記憶に刻んで50年近くになって、勉強不足を痛感した。

妻木晩田遺跡に関わるようになって以後、湯梨浜町や倉吉市内の古墳群、青谷上寺地遺跡、鳥取市内や智頭町の遺跡などを訪ねて、国道9号線を何度も行き来した。天神川を渡るたびに、ここが長瀬高浜遺跡と思いながら北条砂丘を東西に通り返した。とはいえ、長瀬高浜遺跡に関しては、墳墓がない場所に多数の埴輪が集積されていたことと、柵で囲まれた特異な建物があることのみが印象に残っていた。興味がある部分だけ報告書を読んで遺跡の推移について全く理解していなかったことを、今回の講座で思い知った。

佐古さんの質問（坪井清足先生から下された宿題）にあったように、この砂丘でいつから人が住み（活用）始めたのかを把握することは重要な課題だ。稲作や畑作を基盤とする集落経営にはおよそ不向きな砂丘地帯に人々が進出した契機と時期、その生活痕跡が何時途絶えたのかを把握することは、遺跡の盛衰を考える上で欠かせない視点だ。

学び直し

1月のやよい塾講師の田中正利さんから学ぶことが幾つもあった。時代をおって長瀬高浜遺跡をみると、まず弥生前期の玉作の痕跡と弥生中期の墳墓群が確認された。それがこの地における人の活動痕跡の始まりのようだ。続いて前方後円墳時代（古墳時代＝塾長通信17号参照）前期の竪穴建物（竪穴住居址）群があり、中・後期には集落が途絶え墓域になっているようだ。その後、古代の建物群があり、室町時代初期には畑に利用されたものの、それ以後の人の活動痕跡は途絶えているとのこと。土壌化した黒い砂層と自然体積による白い砂層が、その違いを雄弁に物語っていた。

連続性が乏しい各時期の人の活動痕跡（目的）は、意味合いが異なっているようだ。弥生前期の玉作については、他地域で産出する石材をこの地で管玉に加工した人がいたことは確かだが、玉作りは農耕生産に不向きな場所砂丘でもできる。問題は、玉作がなぜこの地で行われたのかということだ。それについて、わたしは見解を持ち合わせていない。

弥生中期の墓域に関しては、多少理解できる。弥生時代の墳墓は、前方後円墳時代の墳墓の立地にも通じるのだが、水田や畑を営むのにも居住域にも不向きか利用価値の低い地形に築かれることが多い。この地域では遺跡の近くにある東郷湖東縁の尾根上に馬ノ山4号墳や北山1号墳、宮内狐塚古墳など全長100m級の前方後円墳が築かれている。いわば東伯耆の最有力層の墳墓だ。

謎だったのは、前方後円墳時代前期の竪穴建物（竪穴住居）群だ。懸念の一つであった水の確保については、砂丘の低地部やその周辺の井戸もあるとのことで納得したが、それでもなぜこの場所を居住地に選んだのかという疑問が残る。この時期のこの地域の土器を細分する技量はないが、相当数の建物が同時併存していたはずだ。この場所で暮した人たちの生業は、何だったのだろうか。

田中さんは、遺跡の東に位置する東郷湖は、山陰各所にある潟湖の名残で、そのまま日本海に通じていると紹介された。場所は特定できていないものの、港があるのではという含みを感じさせる表現だった。

長瀬高浜遺跡への妄想（私見）と期待

以下、長瀬高浜遺跡の前方後円墳時代前期の竪穴建物群と埴輪の墳墓がない場所で多数の埴輪が出土していることについて、わたしの妄想を記す。

前方後円墳時代前期の居住域は、東郷湖と馬ノ山ほかの古墳群が関係しているのではないかと。一つの解釈は、港湾関係の遺跡。長瀬高浜から20kmほど東に弥生時代後半期、日本海交易の拠点だった青谷上寺地遺跡がある。その一帯は、前方後円墳時代前期以降の痕跡は激減している。入れ替わりに登場するのが長瀬高浜遺跡だ。今期のやよい塾に学ぶと、長瀬高浜遺跡は青谷上寺地集団に替わる海村・海民の集落の可能性もあるかも……

もう一つの解釈は、墓造りの民のムラである。先に記したように東郷湖の東縁には前半期の大形の前方後円墳3基とそれに付随するような古墳がある。祭祀跡という解釈もある長瀬高浜遺跡の大量の埴輪の「集積」は、それらの墓に使用されるはずだった備蓄品の残りの可能性はないのだろうか。

いずれの解釈も多くの課題を残している。調査・整理を担当している研究者は当然のことながら、このような想定も視野に入れて确实（実証的）に指摘できる内容を検討している。どこまで解明が進んだのか、あたらしい調査報告を待ちたい。